

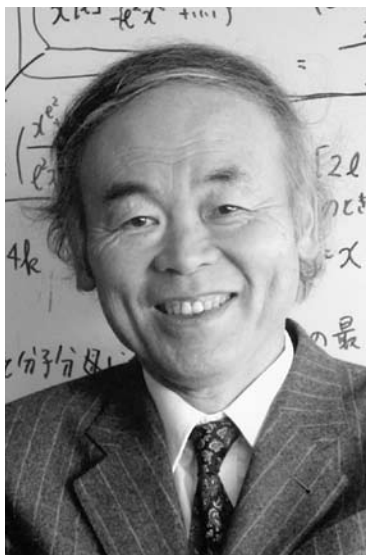
本当に深いものは数値では表せない

数学者 藤原正彦

木造校舎には涙がにじんでいる

皆さんが卒業した小学校の校舎は木造だったでしょうか。しかしいま、その校舎はおそらくほとんどがコンクリートで建て替えられていると思います。

それが最近、木造校舎が見直され、復活運動が起きてきているようです。当然でしょう。私は木造校舎を見ると、「あつ、涙がにじんでいるな」と思います。子どもたちや先生、両親、みんなの何十年間もの涙が古い木造校舎ににじんでいる。コンクリートの校舎は涙をはじ



いてしまいます。それだけでも、子どもたちが成長したときの思い出の感情がまったく違います。

こうした感情が木造とコンクリートでどう違うかは、数値で表すことはできません。所得のようなわけにはいかない。本当に深いものは数値では表せないのです。数値を並べた理屈ばかりでは人間は救われません。

「民家はいいなあ」「美しい自然はいいなあ」あるいは「もののおわれというのには心持がいいなあ」。そうした情緒的なものを大切にす

る運動が、どんどん広がって行ってほしいものです。コンクリートジャングルのような地域と、川や森が見える地域に育った人とは心持ちも違ってきます。

美しい自然が身近にないと、美的感受性は育ちません。この感受性がないと、数学や物理といった自然科学、もちろん優れた文学も芸術も生まれません。ノーベル賞を受賞するような新しい発想は生まれてこないのです。

貧しいが幸せな日本人

この二世紀の間、日本じゅう、いや世界じゅう

藤原正彦 (ふじわら・まさひこ)

1943年、旧満州生まれ。
東京大学理学部数学科大学院修士課程修了。お茶の水女子大学名誉教授。
数学者、エッセイスト。作家・新田次郎と藤原ていの次男。

『数学者の言葉では』『若き数学者のアメリカ』(日本エッセイスト・クラブ賞受賞)『遙かなるケンブリッジ』『国家の品格』など著書多数。

の人が、効率とか能率、快適を追い求めました。その結果、いろいろ進歩してきているように思っています。逆が遅れていっている面も随分あります。

たとえば、幕末から明治維新の頃に来日した多くの外国人は、「日本人はみんな貧しい。しかし、ここに笑っていて幸せそうに見える」とたいへん驚いています。というのは、欧米では貧しさは不幸で恥ずかしいことで、金持ちになるのが夢だからです。

当時の日本人が、どうしてそんなに幸せそうだったか。

大家族制度のもとで家族みんなが助け合っていたからです。コミュニティもみんなで助け合い、思いやりがあった。そこでの強い絆がストレスを和らげ、お金がなくても幸せに思うことにつながっているんですね。確かに個人の自由は限定され、束縛も多いです。けれども、みんなが安らかに穏やかに暮らしていけます。

一方、欧米型の社会は自由を満喫できませんが、孤独であり、いつでも戦っていないといけない。常にストレスを感じている。そういう社会を日本は真似してきたのです。昨年六月に秋葉原で起きた無差別殺人は、現代の日本のすさんでいるようすを象徴していると思います。効率や能率を追求する社会は、いまや限界にきているのではないのでしょうか。

江戸時代は武士が一番貧乏でした。士農工商とはいえ「武士は食わねど高楊枝」と言われるくらい、食べることにも不自由していたわけです。しかし、武士道精神という道徳倫理によって尊敬されていました。経済成長などは、たかが経済なのです。金をどれほど持っていたからといって尊敬されることはありません。給料が半減しても、ご飯に味噌汁とおこうで十分生きていけます。私が子どもの頃は、それが普通でした。成人病にもなりません。

かつて日本人の核となっていたものを開国した日本は捨ててきてしまった。住居も、夏と冬の温度差が少ない、快適で便利な家になりました。その代わりに失った、とても大きなものがあるわけです。

金の多い少ないではなく、家族、共同体や自然、あるいはその人の持っている教養、情緒、思いやりといったものに価値を置いていく。そういうもので相対的に人間を見るような社会にしていきたいものです。